瓜生氏

日本國畫

東海道

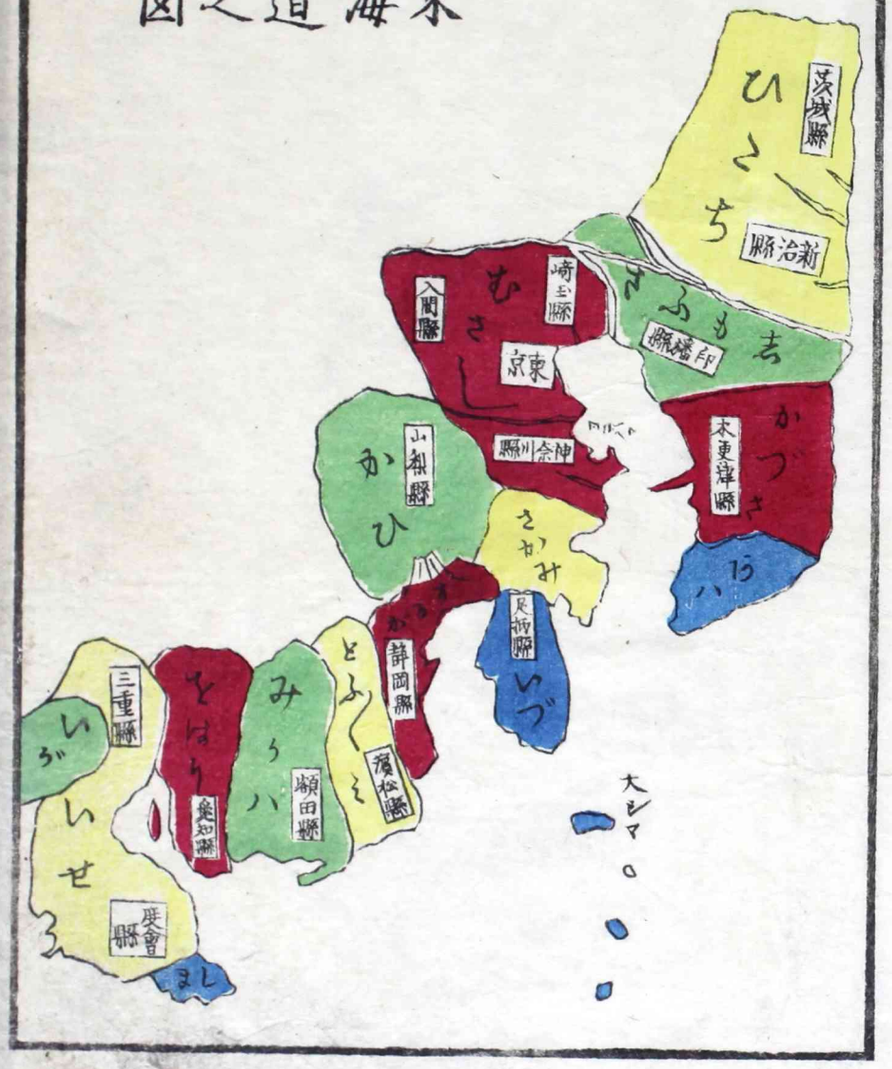
二

291
12
2

報
1
102

291
12
2

東海道之図



横浜国立大学附属図書館
05874101

瓜生氏日本國盡卷二

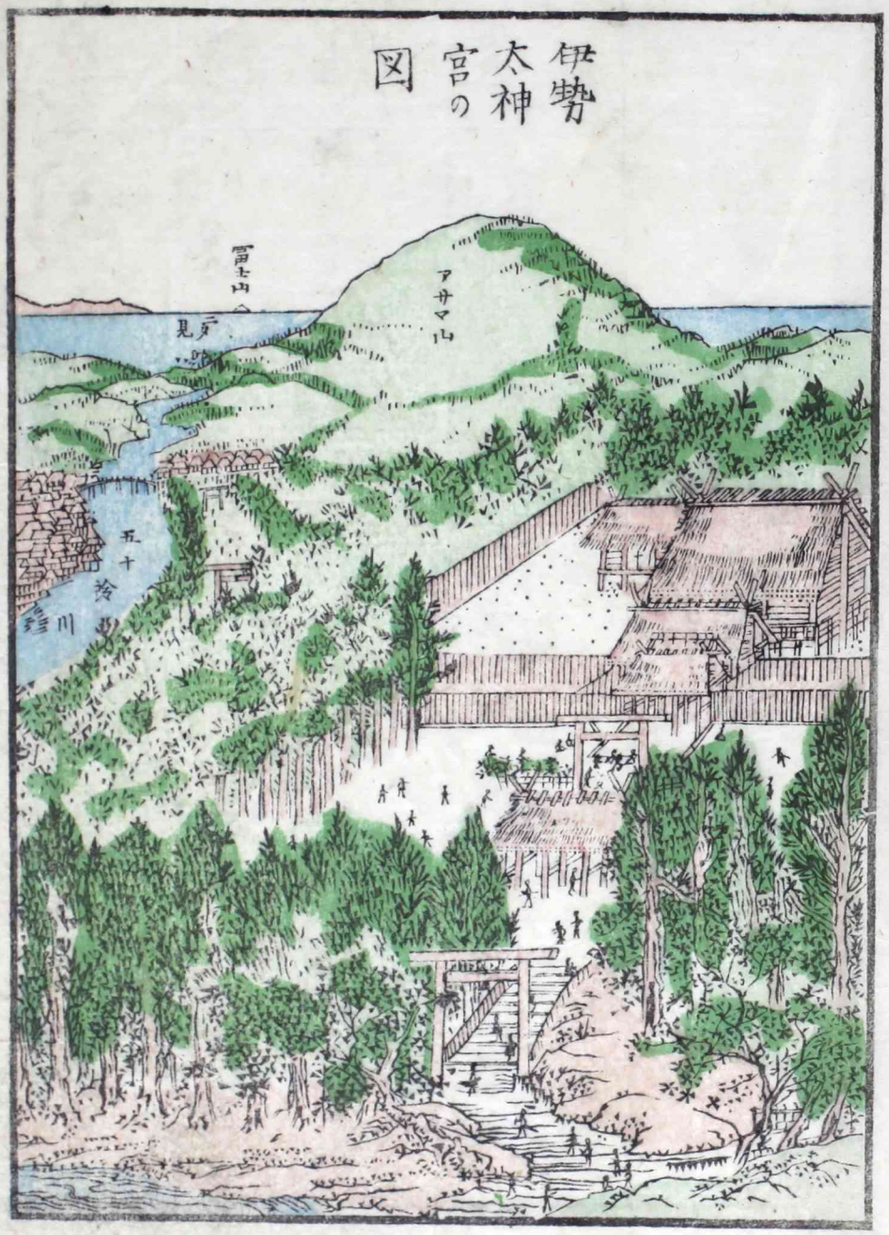
東海道八十五國

南東より海をうけ。西北とも陸地なり。是八道なり魁なり。

甚第一を伊賀とつ。五畿の

東の山國より海の國に
抜ける四つ。畿西の和泉を
對し。二つの耳のごとくなる。
曰方山。より川多く。人口繞八
万人。家倍を程好くあり程
どん。民猛毒を風として。

降れる伊勢を比べなむ
しこそ抜きところあり。
才二の伊勢を垂仁の帝
来
天照太神の宮所五十鈴の
川の水にて。立をもつく



伊勢太神宮の図

長岡ちかる。彩日の升る君が
代の光るを輝く源こそ内宮
の御神なれ。外宮こそ豊受
太神。天地開闢始祖なる。
國常立尊なり。内外の輝
籬自ら。神霊いとも

こゝて。我が邦は大和。
備中國は一西方。伊賀紀伊。
大和は界にて。山高く
打並び。國中川は亦多し。
東の方は一体に。海濱にて
き尾張地にて。北向き合て中

図
宮の
大林
樹

き海。名けて伊勢の海といふ。其海小り八ツ入こみて桑名といふる一市街なり。東海道なり一宿驛。尾張の熱田迄通ふなり。海上七里渡しあり。海を沿て路二里。南北方の四ツ市。三重の縣の廳あり。

伊賀一國。山國の郡八ツを支配せり。其又南宮山。高き山田の市中なり。度會縣の廳を置き。山國五郡。志摩一國。紀伊の一郡

を管轄し。彼れ有史以来こ
の内たる事。一國中に人口四
四十七万六千余。氣候も暖
事和ほくして。山海平均
地味厚く。温和にして地の形
風俗。保勢の事なし称せ

ど。風俗一体親しのくうたぐふ
金の色を見せ。言に体も
志ろしく。内に紹介ごと
して。心きたれる事とて有あ
事。されど学べば自ら。罪
化に進む智も生じ。敷き

風ふきて玉ちるべし。若狭の名所
を朝鮮山。万金丹の名所を
ゆ。伊賀・伊勢。近江の界を
を。鈴鹿山や八十瀬川。
笑ふ戸ざゝび浪風も立ぬ
二見の浦千島。ちゝ仙

ゝる。尤ゆや。その外阿潟・潮潟。
又名物の昆布を蛤・鰒・和布・
海藻・海元・白魚・水銀を。
津・戸・木綿や伊勢暦。
ゆ三志摩を勢州より。辰
巳を張ゆ。岬を。二河の

の伊良子の御崎。伊勢
の八江の門を出て。其の
間今まで。廣く海中
指出を。その須ヶ地墨
濱ヶ。岸おの者土蛭
天方ヶ。浦と有る。今

尚殘る島。元ヶ知地
の地ヶ。今は田地
ヶ生後ヶ。伊勢の國より
さきヶ。志摩の國
地ヶ入ヶ。七國
五ヶ小國ヶ。海藻多く

土地あしく。人口三万七千余
気候風俗却てよろしく。伊
勢とのもてまし。ところ
し。若し名高き鳥羽浦
と。東海船の碇泊場。こゝを
出れば七十五里。伊豆の下

田に着。また三崎に廻
船。海。そのあひだ
風待。潜。
船宿十ヶ所。過て
ようやく。みゝ浦に
帆をおろし。旅の労をや

さもさ〻ぢ。その産物ちとさう海苔。鮑ふくだみ生蠣貝四の尾張ち伊勢の海北ふ東その岸ちして。北ハ山打海ひ。南ち海濱おほぐき。南北長く東西ち。狹く

狹く鯔嶋を。接り臥せた る形象。そ鯔嶋の庭北方。北より本宮川流れて。西ち向く海ふ入る。北川美濃と尾張北の界ふあるそ一名を。尾越川とん申ち。

並び繁昌の一郡なり。名
古屋といふる市街なり。三郡
に比べ殷ひ多く新を
并で商人多く富豪の家
のいと多し。西より尾州の
縣廳なり。當國七郡を管轄

し。郡を知多の一郡なり。海
濱にて岬多し。隣國
三河の領地なり。支郡廳
の支配なり。八郡總して
人口六十万とぞ。五
千七百あまるなり。氣候

暖気なる土地にして人物
富饒なる金玉産物の
風俗なり。昔より秀しる人
多し。其産物は綿
蒲鉾。海産物は瀬戸
焼器。

尾張五条河内。矢部川大平川
と豊川の三つ共大河なる
故なり。矢河の國と我昌へ
あり。南は海濱北は山
境界も廣くして平原
暖国なり。南の海へ

抜ける。渡美という一郡
なり。尾張に接し智多郡に接び。
二方の角にごとくなり。
其端志摩と対し伊
勢の海に入口。伊良古
という岬なり。備中國に

一國なり。土質一般あしくして。
五穀の熟しにくき所なり。
暑温和なり風俗実多
くして恥を知る。人口四十二
万余。額田の郡岡崎より。額
田に郡の府あり。参河の

中と尾張なる。知多一郡を管轄す。名倉は熊石・吉良雲母・芋川温飩・足代紙。是を奉るの名物也。

甲斐六番を遠江。北を高峰おひ重る。秋葉白嶽・真影。

春日大日白光山。中を流る天龍の川。隣國信濃なる諏訪の湖より出て。全國中を曼延す。東の方を大井川海道一は大河なり。駿河は國と境をなす。南の方を

皆海を埋め、塩竈坂より眺望して、沖を即ち遠望の洋、左辺海外西にして、天水を一望に眼を遮る物もなし。風雲を奏河とかなり、北山中なり、土質

厚くよく熟す。一國中の人口、三十四万二千余人、家つゝく智もあるもの少く性急のもの多し。寛政、明應八年地震演れ、大山崩れ海と

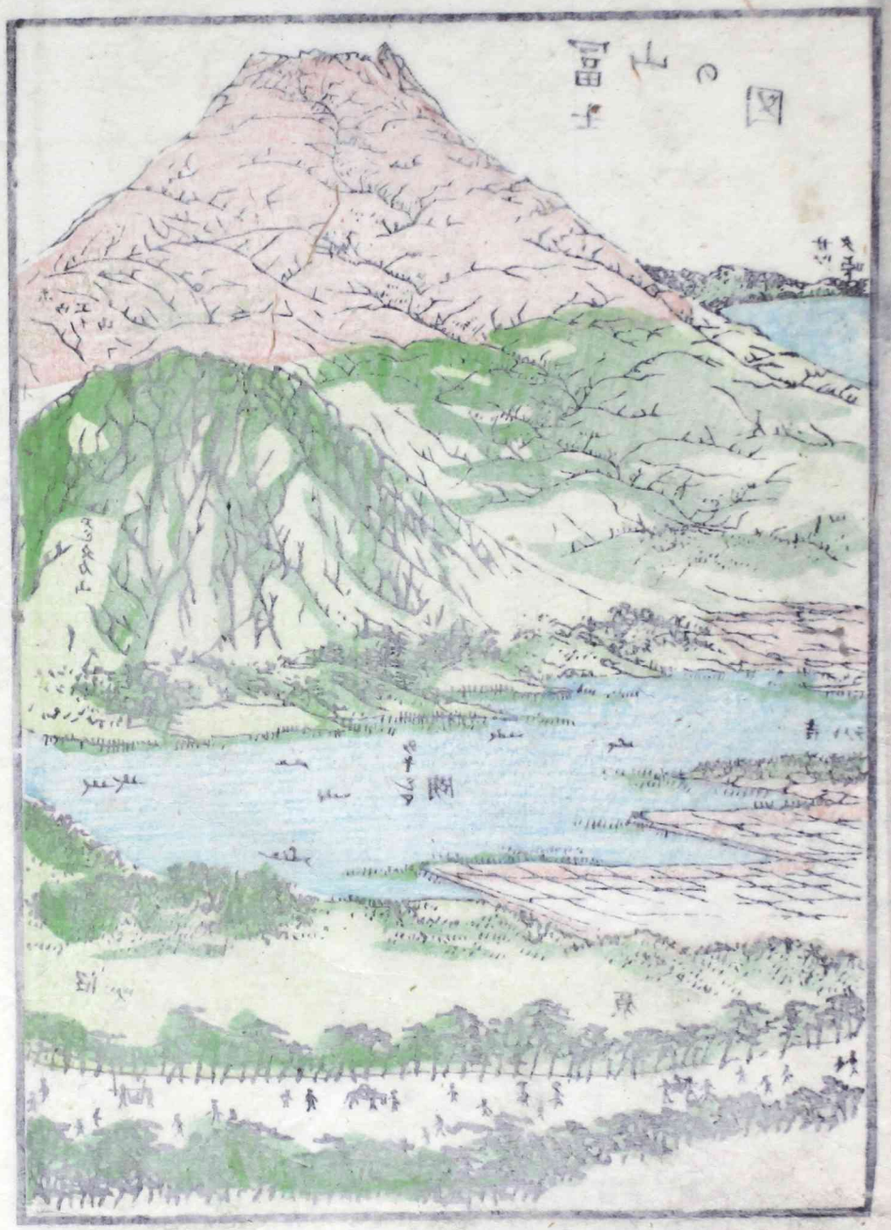
たるを愛宕山と云。今切の渡
井殿海と云。此の門を管小
市御所と云。是を鄙所と
支配する国を遠江の概略
也。其根茎枝葉の事。客掛
掛る所。彩坂也。此名

うるき厳原
七ツ駿河と国海。伊豆
一国と御射。中ツ八海
三保の浦。遠あるを眺
望ず。右と左ふ遠州と。
豆州の山立ち並ひ。廣

き浦頭の其中より清き人が
冥や男子の浦。あまの子は羽衣
いまきてし。あのぬ絶家を
三保の松。旅寐孫は憂も忘る
らん。小さき一面山つづき。三国一
の富士の山。其高きこと海

面より。直立一千四百丈。其絶
頂は白妙の。冬阿弥陀堂を
載せる。樵は駿河の。甲斐。
お模。三ケ國より。跨まく。
其傍に高山は。たまきぶ
しあるは。富士のよりより

人まてる儀ゝなれ。埴よりも
なほ水。主殿や播磨を。
倒し伏せつるごとくみく。
四方八面いづこより。望もん
同し山の王。是ぞ火山の王
しく。今より二千百五十八年



ひのもとなる我国の昔。孝靈天
皇の御宇とやら。一夜に湧
出し山なりとぞいふめるの
言傳。あるまじき不思議のこと
ゆえに。信ぜぬ人もあるべけ
れども。世界に廣く

こゝを我是れ。北井より大
宮に出て作業。古来淀と
あるところ。近くして小の
西里利加より。ジヨルロの軍
の出来りし所。備中國より
川こゝ。一ツ富士川矢の如く

二ツ安倍川の傍ら。靜岡
縣の廳あるこゝ。駿河の一國を
管轄し。町こゝ殊に繁昌
せり。本一國に人口こゝ。二十五万
三千余。地形西南もつぱら
こゝ。山を背負ひ海を抱

き。河を帶びゝる國なり。
ず。こゝ墨中に温暖ふ地味
一群て富み人家繁
遠ものゝ多くこゝに集り。家狹
くて實を失き所縮
なき風ゝや。其產物乃

品ゝ。駿河の紙て紙細
工。杉原。富士苔。沖津鯛。
才八甲斐ゝ山中の。偏地乳
ゝ。一都會。海ゝ魚
拔ゝ五つ。富士山ゝ
霞ひ。林檎て流ゝ富士川

北上流支流國内を縦横
通して西の方地形風皇
駒嶽白嶺の山脈七面山身
延山を引連て小河内を
金峰山板垣山より天目山
高山多き中小甲斐と

いへる都合あり差て廣
たる山梨郡の支配ち甲
斐一國生一國の人口凡二十
九万七千余氣候不正り
物産乏しく草木の外
生産少し人氣も強く強て

不道理なること多しとて
いつへ武田氏時代も淡色
しこと氏ありと云へり其
産物は漆紙や郡内紬
絹。弱と小物は姫胡桃
東海道の第九番。伊豆は

駿河は相模との間より出る
岬なり。三方海岸
なり。北は箱根の険を負
ひ相模の國と氏國界中に
天城の山あり。原多く
七島のあり青島八丈島

海ゝ利も多く所ゝ
温泉湧きゝ中ゝ繪を
名湯ゝ相摸ゝ
海岸ゝ熱海の海の名も
高く惡疾難病あるを
きを厭ゝそみゝ

集ゝ浴を
ゝ其端ゝ下田
の港ゝ地の產を
て置きゝ海上遠く輝
渡る往來の船の影月
光を仰ぐゝ

國中一圓十二万五千五百の人口にて。畠多くして田少なく。四時の気候も暖にして。民俗強中の強にて。偏境なれども何事にも第一にもちまて質朴なり。尤も吟味にて。

其風俗も一なるべし。其産物も一圓にて。隣國相模の足柄郡。備國產にも劣らず。紙の外。十小相模の南にあり。太平洋とく遠州の洋につゞきて。

渡るなり。其海中に出さる。岬にあり。彦と云對し。武藏の海の袋口にも燈明臺あり。渡海の船の便とさて。西より小さき是柄山。大山津久井丹澤山出山より

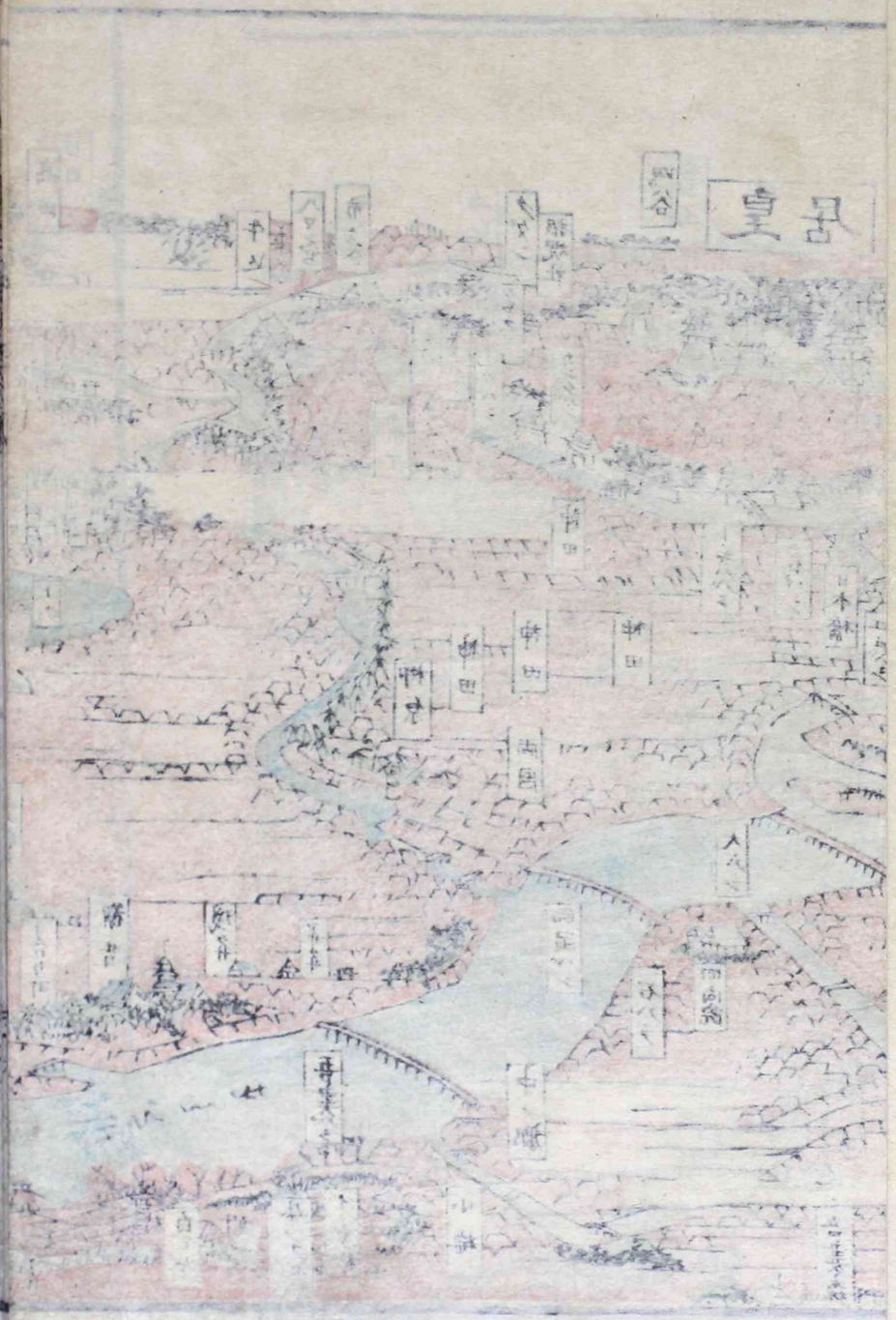
流出る。水を酒白と甲州より。流れて来る馬八と云。二つの川より海へ出づ。馬八の東の三郡を隣國神奈川に支配なり。七里ヶ濱や江の島や。名勝多き地なり

中ゝ。鎌倉に居をしつゝ
へ社。源朝臣頼朝の。創業あ
りしに。古霸の跡。昔中の
都家なりしを。又横須賀社
港ふるを。造船窠を建置て。
蒸気軍艦高船を。新ゝ

造置をしを。西の第根
社山上ゝ。伊豆をしに社
國界。音ふ少え。天嶮の
上下八里社大峠。頂上の
湖水。富士の高根社
新ゝ。眺望取の第也

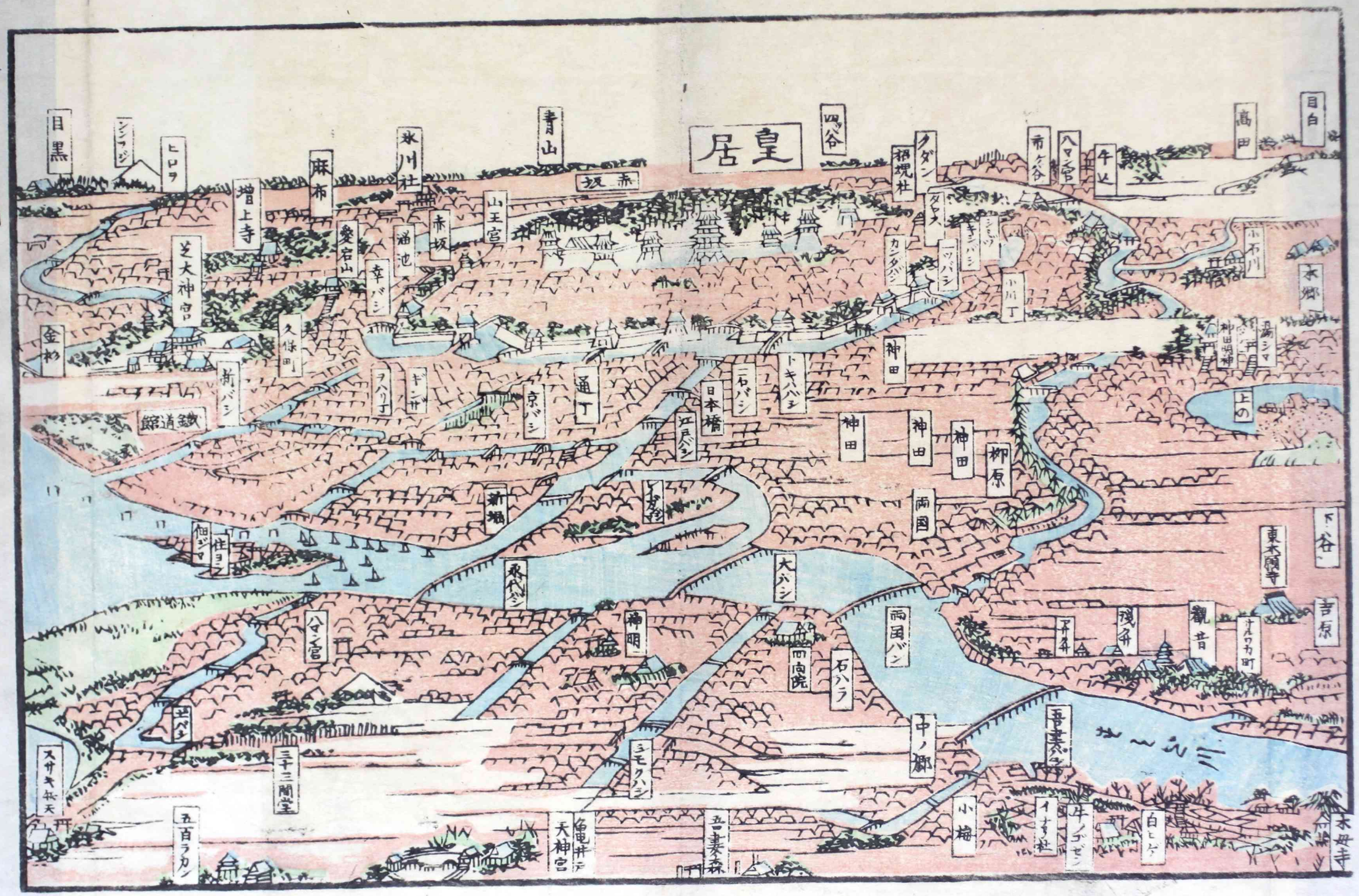
して其の所の七所の温泉あり。湯治の客の絶ることなし。箱根の麓小田原を是相縣の廳なり。馬八匹西の六郡と。伊豆一國を管轄す。一國九郡の人口凡二十七万八千余。

山多く土氣拘ほくして海多く土産候平らかに人気豪にして物少く似れども世ふまた時に随て勢変し易き所あり。其産物は海藿・梅干・大根・鎌倉海老。



第十一は武蔵なり。平原
廣くして、はてしなき。空と一つなる
草の原。茅ばかりぞ生ける。
又草ゆゑる月毛の駒も
今は一群の美人の
土一群は黄金の花ぞ美しく。

東京之圖


皇居
目黒
ヒロワ
増上寺
麻布
氷川社
青山
赤坂
山王宮
四ツ谷
招魂社
市ケ谷
八マン宮
牛込
高田
目白
芝大神宮
愛宕山
幸バシ
赤坂
溜池
カンダバシ
ツバシ
小石川
本郷
金杉
久保田
新バシ
ヲハリ丁
ギンザ
通丁
京バシ
日本橋
江戸バシ
トキハバシ
二ホンバシ
神田
神田明神
湯シマ
上の
錦道館
神田
神田
柳原
新堀
両国
下谷
東本願寺
個ジマ
住ヨ
永代バシ
大バシ
八マン宮
神明
四向院
両国バシ
石ハラ
浅草
観音
吉原
ナルワカ町
中ノ郷
吾妻ノ子
スサキ牧天
三十三間堂
ミモクバシ
五百ラカン
亀井ノ天神宮
五妻森
小梅
イナリ社
牛ノゴゼン
白ヒゲ
木母寺

東京府として四里四方。世に類なき大都會。其人口を百万余。数千の大厦林立似億万の高戸星をごとく。碧瓦白壁立ち并ひ。鏘を立つべき土地なし。

町々は繁栄して人の往来の肩を摩れ馬車人力の音絶えざる。連る袂を幕にして。輝く汗を面を。高貴貧賤の盛ふ。百貨番々輻輳せ殊に

戊辰年乃。王政一新に来て萬機の出づる所ふく。官省寮司吏々。衆を連て孫嶺々巷々中ふたなびく白雲にして。九重に立つ禁城を宮々。舞えく

高く。天津日嗣はいつまでも。住まゝ給ふ宮殿。美麗の長城不夜の城。昇平極樂世界とも。生都をや。いつくんん。まして近畿國は。交易盛ふ却つて。

美人。居を占く。其王位を。沙汰。我甚だ大學小學の設。日々教却ほく。學の道は。たゞ男女の分。おゝて。教をとゞ如。えのとゝ。おの

しめんの御まもりを祈まつり
者ゝ死ゝ生ゝ有ゝ事ゝ
学の道ゝ人の智識を
拡ゝ世ゝ風俗を新ゝ
ゝ家ゝ富ゝ昌ゝ名を
起ゝ一人前の人ゝ

たゝ人ゝ有ゝ事ゝ是ゝ非ゝ
ゝ学ゝ問ゝ男ゝ女ゝ別ゝ
ゝ家ゝ業ゝ者ゝ
土地ゝ学ゝ校ゝ
見ゝ運ゝ服ゝ
ゝ学ゝ

當國は。土地の前は。
ごとく。其いつは武蔵野
とく。曠原平野おつきせ
二郡の大國なり。北と東を
上野と下野と總て界し
て分を隔て流るゝ世ふ

利根川の名も高く。二大江の
中ほとり。坂東太郎と
字せり。生源を上野に
其餘の國より流れ来る
甘樂川乃下流なり。沼田
中川生源を葛西太郎

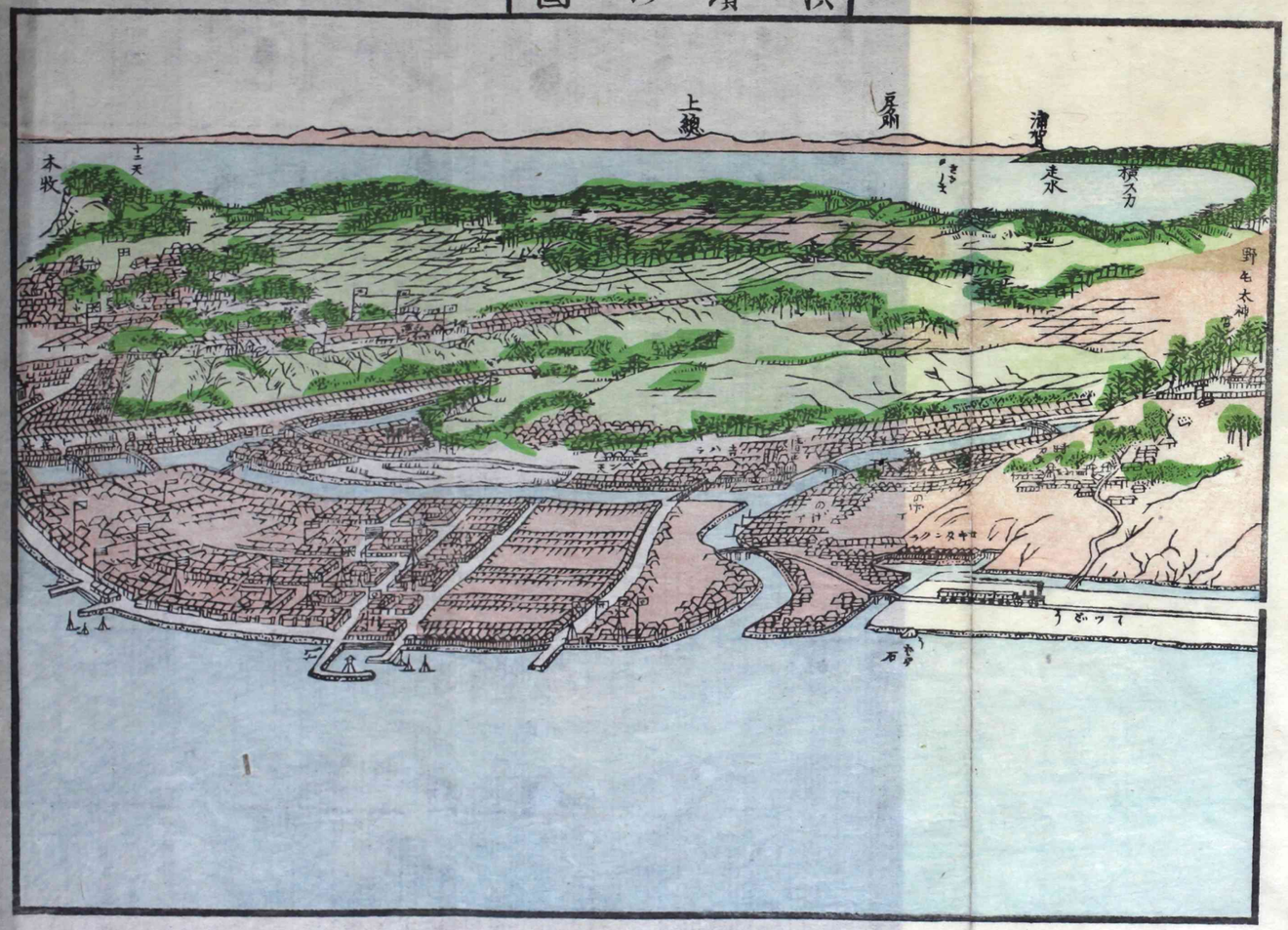
の角田川。其上流を隅田川。
角田の川を墨田の第一名
額は好奇景。富士を絶渡
を東西に隔て互に
相照し。東風吹て春
の日を長堤一帶みな櫻。

櫻は花を雪ともぬ。雪を雪
と三囲の堤の上を織成
りしに。あき過ひの人を。
夏を納涼に。秋の月。
川風をきくの日。こゝ
を掉さして雪見船四季節

の眺望ともいふべし。記
ていはれぬべし。南東は一面に
武藏の海に入海なり。日
本一の大港。大船小船數
千万。蒸気帆前の西洋
船。ひきつゞく其多又出く

ひきつゞく出入。京は西海の潮
みなこゝに流れ東へ
疑はる。西の界は甲斐信
濃。つゞきて秩父の山つゞき。
嶽三峰。武甲山。南は小佛。
高尾山。甲斐の國より流

横濱の圖



きたる。水多摩川清らかに流きたる。末は六郷の渡を過ぎて海へ入る。其末東西に食水なし。地面の下に掘を埋め多摩の流を引きたる。町家

り分つて三ツや。東京より七里。海岸づたひ南北方神奈川宿の生糸の。横濱港より出今盛貿易高社の一大廓。輸入輸出の報し生糸。富商大賈軒を

並べ畫樓繡閣天を突く
市里一箇の珠玉の樣に
仙境は心地せり。拔きもて
ちらく雲を乃濱をつたて
金澤ちなも得べきに京
の脚畳重まれ寫者ごとて。

昔巨勢の金岡は筆を
捨て理ぎさく出るの
管轄を一府三縣をおく
きに京府中の府廳に
ちなに佐原豊嶋の二郡。
夫より見て萬飾の西

をかつく發樓。西の郡
は十三てを。八間郡の川越て。
八百郡の郡あまく。金く
之を支配せり。其又小の埼
玉く。埼玉は是玉葛郡に。
埼玉郡岩槻は。埼玉縣

廳の支配まく。南四郡は佛
国は。相模の國乃三郡の。三
浦福谷高座とし。合て
支配する廳を。かの横濱
の神奈川郡。支配を各分
きて。武藏一國を總計し。

二十二郡にして人口凡一百六十六万人ばかりなり中正土地狹て田畠一体平らかなり。さればこそ繁昌きわまりなくして美麗なること風俗人情奢侈なること江

戸に遠からず。物産屈せぬやう有まじ。都會の地なれば自ら奢美より流れて薄弱なる隅なる風もあるべしと雖も一方にて性質もきの事一方なる。其産物の大概は。淺草海苔小人我

索麺。岩槻木綿。唐子染。
紫染や綿絡。髻結合
羽の烟草入
東十二丁十三町。安房と上
總と地を隔て。南は海
より上總二つ合て廣さ

の海へさし出て岬をなす。相
模武蔵おなじ。武蔵
北海を面国也。東は
なき太平洋。南は海と東
山多く。嶮岨の要所
あり。其界目は鍋山花立

峠清水。土地の産候ものは
武蔵地。このもの〻〻こも
あるものなり。人の氣質も
偏屈なり。安房の人口十
三万上總の國は一國にて三
十六万四千余。中もの〻の管

轄なり。上總の國は木更津
なり。武蔵は向ひ一港
土地お廣ふ却なり。木更
津船屋を立置なり。安房
なり浪の子。木綿苫。目
黒鮫や上總なり。大多喜

鯛り鰒に拾き。又生より名あ
る産こそこれ。
郡十四か下総とて武蔵
と上総り挿まりく。武蔵
の海并に袋庭。小そ常陸小
地をを隣る坂東太郎の拾北

末と。下野常陸并山よりのまま。
流れて出づる川ことと。共に集
まり堰にと。界り沼に海よ
入る於もしにも。其ち一体り。川
河わ流く。沼わ流く武蔵よ
つづく至るまでで。又平原も

和ほ〻と我沼の郡る大友
るを印播郡の人ず沼くの
を不住倉を。當西郡
の九郡をび貢糧なせる縣
廳の是。之を印播の郡い
ふ。猶是東北三郡も陸奥

常陸北土浦の。新治郡北
支配をり。今を〻國の人
口を。四十七万八千余。風土風
俗みなを〻上總の國り
美あ〻び其產物を蒲西
海苔。結城紬千三反栗。

十五常陸は一國にて東海
道のまてに北國西は山に東
海池沼川水充滿し西は
隣の下野より流る川を
那珂川や北より来る久慈
川なり。其名も高き袋田滝

嶺の峯より落る水石野
川。水石野川水源より来る。
霞ヶ浦の長堤四てのびけ
き沈れ。京にまする常陸の
一勝地。土佐の土浦の新治
郡の笠揺も。筑波山を那之

又下総より下る三郡を筑波ふ列る山を言ふ
伊し但仲しを北を金
砂高鈴山磐城の界より
花園山こゝら五郡を那
珂川を水戸の茨城

縣其縣廳を支部とす一國
中の人を数四十八万五千余
其風俗を只管胆を
して我意を以て其意
物を義和固鯉西を固弦
小板原なり

瓜生氏日本國盡卷二終

横浜市立図書館
6483
横浜分館 昭25.4.14

横浜国立大学附属図書館
05874101